



LA NOUVELLE

N°7

AUTOMNE

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者 神奈川孝子 (昭37)
2011.9.25 発行

日本の文化外交再考

東京外国語大学教授 渡邊啓貴

--- 日本外交の将来像

暖かさ程よく、初夏のようなさわやかな2008年4月の薄暮、妻と十歳になる長男の我が家の三人はパリに到着した。

もうすぐパリは「美しき五月のバリ」と呼ばれる季節に入る。しかしこの年は春の訪れが早く二月に花々が咲き誇ってしまっていた。学生時代以来の年単位での長期逗留、さまざまな期待と不安の中で始まったパリ生活の立ち上げであったが、役人仕事の慌たしさは想像以上で、それ以後「美しき五月のバリ」を心から楽しもうという気分にはなれずじまいとなった。

気づわしい役人仕事に拍車をかけたのが、2008年が日仏国交樹立百五十周年の年に当たったことであった。年間で758もの大使館登録の日仏関連文化行事が実施された。ピーク時には一日四回祝辞の挨拶をしたことも何度かあったし、朝昼晩と一日三度も大使公邸での会食やレセプションに臨席したことも度々あった。

役目柄、わたしは現場の外交の中で日本文化とその普及について考えることを余儀なくされたが、その中でいくつかのパラドックスを発見した。

その第一は、日本文化の特徴は第一に「質素」であるということである。留学生時代後に国家安全保障局長の役割を務めた人物と親しくなったが、知日派知識人であるこの老人の日本文化に対する見立ては一言でいえば「質素」という言葉に尽きた。日本文化の起源をたどれば、その多くは「禅」にたどり着く。それ以前の日本文化はどこか頼りなく、それでいて素朴な自由さを大切に、明るく洒落っけがあった。本来の日本の個性は仏教、そしてとくに禅宗の隆盛によって生真面目で、単調さの



中に意味を求めつつ、内省的なものに代わって行った。

今日外交面で軍事・経済の意味が変容してきており、「ソフトパワー」というような言葉が使われるようになってきている時代において、この日本人的メンタリティーはマイナスである。ひとつは欧米諸国との自己表現の仕方に大きな違いが生じていることである。一步控えて「空気」を読む文化はいかにも地味である。「謙虚で、出しゃばらないこと」がリーダーシップの要件であるというのも特殊日本的である。その根源には相互信頼関係が内向き志向の上に発展した社会組織原理はエリート官僚の間でも例外ではない。現場の外交官たちの心理は大使以下、東京を常に向いている。それは外交の原義にもとるものであろう。これは第二次大戦を経て世界第二位の経済大国になっても不変であった。日本外交活動の限界は第一に、日本人と日本文化そのものの対外接触での限界なのである。

第二に、これはどこにでもあることなのだが、文化を外交の手段として考えるとき遭遇するのが文化絶対主義との戦いである。昨年フランスでは文化活動を統合する機関として「フランス院 (Institut de France)」という再編機関が誕生した。このフランス院は産業・通商対応可能な公共機関 (EPIC) として立ち上がった。クシュネール外相 (当時) はフランス院が EPIC であるとしても、「文化を売り物にはしない」と断言した。この問いは文化外交を語るときにどうしても避けては通れない、機微で本質的な問題である。文化産業との協力関係は不可欠だが、度が過ぎてはならない。EPIC であることによって新機関は民間支援が容易となるが、外務省から多額の予算を保証されているわけではない。

文化とは何であろうか、という問いかけである。ただ、外交レベルで考えるならば、「文化を売り物にしない」ということには限界がある。文化はそれを味わい、精神的な至福を享受するものにとっては、価格で計られうるものではないのである。つまり何か他のもので代替できるものではないのである。

しかしこれは原則論、ないしは理想論である。実際には美術品や音楽がどれだけ素晴らしいかは、人気をバロメーターとして結局は価格となって示される。付加価値はさまざまな形で膨れ上がるが、そこにイメージが形成され、ブランドができあが

る。そして文化的価値はさらに大きくなり、相乗効果が生まれる。

こうしたことを日々痛感したのがわたしの外交官生活であった。その中で、いわゆるコンテンツ文化産業をどう位置付けていくのか。この点が今後の日本の文化外交をカギを握ることになる。ポップ・カルチャーに代表され、アニメ・マンガ・DVD・ゲーム・Jポップなどの「クール・ジャパン (カッコイイ日本)」と称せられる領域に対する賛否両論はある。こうした「ポップが日本を代表するものではない」、「ポップカルチャーファンは必ずしも日本文化に関心がない」などの反論はある。

しかしこれらの分野に関心のある人々の数は膨大である。彼らの一人一人が日本文化の本質を究める必要はないではないか。ミッキーマウスがかわいいからと言って、皆が皆アメリカ文化や社会に興味を持っているということではないはずである。しかしこうした人々が日本に対する好イメージを持つようになることは確かである。後はそこからどのようにして真の日本ファンが生まれていくのか。そのひとつのきっかけは日本語教育の振興であろう。ディズニーに親しみ、英語を使うことは平均的日本人にとってまさしく、「クール」ではないのか。

だとすれば躊躇すべきではない。日本の伝統文化に関心を持ってくれるまでになったフランス人はまず間違いなく、「日本ファン」である。その底辺を拡大しようではないか。内閣府を中心に各省庁のこうした分野での関連活動がまとめられようとしている。もちろん一番積極的なのはこの分野での海外活動が直接通商政策に結びつく、経産省であり、観光庁・国土交通省である。それらの海外での展開をサポートする形で外務省の活動、文化絶対主義の立場を抜けきれず、民間の利益活動と一線を画して国際交流に固執する国際交流基金というような省庁間のスタンスを官民合同の国民的規模の外交活動としてどのように考え、提案していくのか。

高度経済成長の中での商品の販売から一歩進み、サービス・文化という付加価値の高い分野での海外輸出の段階にまで日本はようやく達した。この機運をうまくつかむことが日本外交の一つの命運を担うことになるだろう。その気持ちを強くかみしめながらの帰国となった。



2011年度 東京外語仏友会 総会報告

仏友会 会長 神奈川孝子 (昭37)

4月23日(土)午後、仏友会第14回総会が大手町サンケイプラザにて行われた。

それに先立つこと約1ヵ月前に、日本は東日本大震災という大惨事に見舞われた。地震と大津波による死者・行方不明者は9月10日現在で約19,800人に上るが、その後の福島原発事故は6ヵ月たった今も日本ばかりでなく地球規模で我々を不安と焦燥に陥れている。

外語大においては、約20名の学生の家族が被災されたということが報告されており、心からお見舞い申し上げます。

こんな状況の中で、仏友会総会を準備するにあたって、開催できるのか、していいものなのかどうか私達幹事は迷った。実際多くの行事は中止、延期となっていた時期だった。

しかし、この閉塞状況の中でこそ、皆に会いたい、楽しく過ごしたい、そして平常心を取り戻したいと思う人も多いのではないかと、開催に踏み切った。

ちょうど一年前に、在仏日本大使館の広報担当公使として2年間をフランスで過ごし帰国された渡邊啓貴教授を講師にお迎えすることが以前より決まっていた。演題は「文化外交よもや



ま話」で、フランスにおける日本文化の現況などを、楽しく話していただいた。

この日はかなり雨もひどく、キャンセルも多いのではないかと心配したが、嬉しいことに常連の会員、新会員合わせて約60名が集まってくれた。その中で、いわき市小名浜にお住まいの会員の鈴木順子さん (昭48) が、元気なお姿で参加してくれた。鈴木さんは、自宅庭先まで津波が来て、高台に避難され、その後は、床下浸水で収まったので、家に帰っているということだった。私達は彼女の無事を喜び、その参加を本当に嬉しく思った。講演後のいつものワインパーティの時にひとこと話して頂いた。とにかく誰に会っても「無事だったのね、命があってよかった」が挨拶がわりの合言葉だったことを、涙ぐんで話してくれた。

「乾杯!」とは言わず、小さな声で、「A Votre Santé」とグラスをあげて、いつものパーティが和気あいあいとはじまり、今年の仏友会の活動の始まりとなった。



鈴木順子さん (中央) と現役の学生さん (右端)

第16回サロン仏友会

～歌とボジョレ・ヌヴォを楽しむ会～
Kimie Petit Concert「シャンソンと私」

今年のボジョレ・ヌヴォの味はいかがでしょう。この度は趣向を変えて、シャンソンとおしゃべりの、ちょっとオシャレなひとときをお楽しみください。

日時：2011年11月19日(土) 2時～5時
1時50分までにご入場ください

会場：本郷サテライト 3F・8F

参加費：2,000円

お話とシャンソン：2時～3時30分

出演：小幡君枝氏 (昭52)

Kimie：フランス語で歌う
シャンソン歌手、都内ライブハウスなどで活躍中

ワインパーティ：3時30分～5時

申込は11月5日(土)まで

10月半ばまでに、メールアドレスを登録している方にはe-mailで、その他の会員には往復葉書でご案内します。

連絡先：

藤倉洋一 (昭45) fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp

相馬壽美乃 (昭39) TEL/FAX 03-3465-6835

富山絢子 (昭39) ANB73700@nifty.com

神奈川孝子 (昭37) mt-kana@mx6.mesh.ne.jp

TEL/FAX 03-3313-4310



東日本大震災で「つなぐ」援助を実践

松本伸夫 (昭 38)

毎春恒例のカンボジア現地研修を終えて帰国した3日後の3月11日午後2時46分東日本大震災が発生、東北地方は地震と津波の波状攻撃を受け、そして続けて第3の悲劇、原発事故が福島で起こりました。それ以来カンボジアでの学校建設をここ18年間主な活動としてきた私の所属する認定NPO法人「JHP・学校をつくる会」(小山内美江子代表理事)も宮城県南三陸町を拠点に緊急支援活動を開始。毎夏大学生中心のカンボジア活動隊派遣も今年は中止して、宮城県での救援活動に集中することになりました。

6月13日現在の大震災死者は1万5424人、行方不明者7931人で、阪神大震災の被害を大きく上回っています。とくに行方不明者数ではわずか3人だった阪神大震災に比べ今回は圧倒的に多く、救援活動が難航している大きな原因ともなっています。住民1万8000人余だった南三陸町でも死者535人に対して行方不明者は667人もおり、手掛かりを求めて瓦礫の町を歩き回っている被災者の姿をよく見かけます。こうした悲惨な人々にとってわずかな希望といえば、行方不明者をしのぶ写真や思い出の品ではないでしょうか。こうした生者と“死者”を「つなぐ」心の救援活動として宮城県三陸海岸沿いの被災地でボラティアが集団的に展開しているのが、「思い出探し隊」活動です。

70歳を超えた高齢者の私でも出来る根気のいる仕事でした。まず南三陸町災害ボランティア・センター隣接のテント小屋に続々運び込まれる泥だらけのアルバム集や写真、役所書類などをぬるま湯につけて軽く洗浄。泥を落としたあとはキッチン・ペーパーで水分を吸収して1枚写真ならクリップ留めにして乾燥させる。乾いたら大きなハترون紙に貼る。アルバムなら1ページずつ開いて水分を拭き取り、廃校になった小学校の床の上に並べて陰干し。自衛隊員らが瓦礫のなかから見つけたこうした思い出の写真、アルバムは、位牌なども含めると南三陸町だけで40万点以上にのぼります。100人近いボランティアを総動員してもなかなか整理できないのが実情です。5月28日から6月5日まで旧入谷中学校で約10万点のアルバムなどを展示、初日だけで800人が訪れ、心をつなぐ写真などを持ち帰ったそうです。まだ思い出の品々は30万点も未洗浄のまま残されており、「思い出探し隊」のボランティア活動はまだまだ続きます。

JHPが東日本大震災救援活動を開始したきっかけは、2005年夏カンボジアに赤いブランコを建てる活動隊に参

加、その後教員として仙台市若林区蒲町小学校に勤務している元田健太郎教諭(31)からSOSの緊急電話がJHPに入ったことから。「近くの小学校が壊滅、避難民約200人が校内で暮らし、食べ物、飲み物が不足している。助けてほしい」という訴えでした。小山内代表はすぐに会員で俳優の渡瀬恒彦さんに連絡、カップ麺1000食を調達、3月19日に第1次隊を編成して飲料水とカップ麺、トイレトペーパーなどの支援物資を届けました。

カンボジア研修の引率を終えたばかりで1次隊に参加した木村晋也職員(現JHPカンボジア事務所長)から「支援物資の提供だけでなく、地域復興に関わるボランティア活動が必要」との提言があり、検討した結果、3月末で退職するJHP職員の芳賀幸子さんの宮城県南三陸町の実家が地震被害で壊滅状態になったことがわかり、人脈のある南三陸町社会福祉協議会に発足したばかりの災害ボランティア・センター運営スタッフとして参加することになりました。4月9日から同センタースタッフとして働き、6月からは東京のITコンサルタント会社を退職して再び長期スタッフとなった影山伸一さん(37)も元JHPボランティアで1975年の阪神大震災で活躍した人。宮城県の新聞にも何度も取り上げられ、そのたびに「企業にはボランティア休暇の制度確立に取り組んでもらいたい。個人なら被災地の産物を買うのもいいし、風評の被害に苦しむ観光地を訪れるのもいい。思いを行動で示すことが大事です」と訴えていたのが印象的でした。

JHPの小山内美江子代表も5月中旬、車で南三陸町入りし、3日間滞在。この間生徒・父兄167人の行方不明者を出し、町教育委員長も行方不明となったままの志津川中学の菅原校長を訪問、学校長として社会的外傷の大きかった同校長の心の痛みを約1時間じっくり耳を傾けました。2人の間で心と心がしっかりと「つながった」と感じました。



津波による人的被害の大きかった南三陸町志津川中学の菅原校長(右端)を慰問する小山内JHP代表(左端)。左から3人目が筆者。

を思い起こしていただきたい。軍の過失事故が「爆弾三勇士の美談」に変わってしまう戦時下である。無情報・偽情報の中で座して赤紙を待つだけの無力な学生層に、どうして客観的な自己認識・世界認識ができれば。行き場を失って空転する知性、それを上回る「愛国の赤心」にひたすら身を浸すことが、当時平安な日常が許される「国民作法」ではなかったか。作法をわきまえぬ者は「非国民」とも蔑称された。狂気のような軍国スパルタも、そんなふうであったのだろうか。

受講時間の約4割が軍事教練であったと会報にある。昭和7年12月、那須の金丸原で野外教練。近衛歩兵第一連帯營庭で施行。査閲官は近歩第一旅団長陸軍少将松田閣下。一同、常日頃の腕前を見せ所と、泥の上にも勇敢に伏せをする。涙ぐましい光景である。然るにその奮闘も千軍万馬の老將軍の馬前には効果なく、講評にいわく「成績良好なれども氣勢足らず」と。外語健児、悄然としてズボンの泥を払う。また、勅語奉読式あり。これは今度初めてのことであり日曜のことであり、生徒一同大狼狽。ズボンの泥を払う学生たちの心は自由に憧れ勅語奉読には閉口しながらも、一方、父祖伝来の皇国史観は幼年期より自然に肉化していたか。指定の場所で参拝したが、其時「何事のおはしますかはしらねども唯ありがたさに涙こぼる」といふ古歌を思ひ出したばかりであった。両眼には涙が滲み出た。漸く非国民の汚名を除去することの出来た喜びは何に譬へんか。と瀧村立太郎は感涙にむせぶ、自分は大日本帝国臣民であると思うだけで、涙があふれるのである。

「戦後民主主義」なる教育を受けた我々世代には、理解のおよばない大先輩方の心境ではあるが、当時のそうした日本人たちが、悲憤の炎のように燃え上がり想像を絶する力を世界にみせつけることとなる。西欧諸国の目には、日本人が神秘・不可解な民とも思えたに相違ない。(次回へ続く)

《フランスの時事トピックスから》

L'affaire DSK

藤倉洋一 (昭 45)

国際通貨基金(IMF)で辣腕をふるい、次期フランス大統領有力候補でもあったドミニク・ストロス・カーン(DSK)が米国で逮捕されたニュースはマスメディアにより地球を駆け巡り、世界を唖然とさせた。

容疑は「監禁・性暴力・強姦未遂」。5月14日DSKはNYのホテルで客室係の女性を襲ったとの容疑で、ケネディ空港で離陸寸前のエールフランス機の中で逮捕された。手錠をはめられた姿やNY裁判所予審公判でのDSKのしょぼくれた姿は特にフランス国民を驚愕させた。

DSKの多くの支持者は推定無罪を信じたものの、フランス男性を“ホット・ラビット”として警戒する米国のフェミニストたちは、女性蔑視を温存させているフランス社会を問題にしており、「女に手が早い」と噂されてきたDSKは窮地に立たされた。

この事件を、5月27付「Le Monde」紙は“DSK事件の3つの教訓”として社説に取り上げているが、その要旨を纏めてみた。

第1の教訓は「文化の違い」で「フランス人は支配階級の違法な行動に目を瞑ることを好む。大西洋を挟む紛争が起きると、価値観の溝が現れる。アメリカの司法制度では、金によって違いが出る。クリントン-ルウィンスキー事件やロマン・ポランスキー事件などはその典型例である」というもの。

第2の教訓は、「フランス人の偽善」で、「ジャーナリストは沈黙の掟を守り、共同責任を負う被告のように見える。議員や大臣の人格に明らかな影がある場合でも、メディアは仕事をしない。フランスのメディアがアングロサクソン流の調査する伝統がないのはフランスで広く共有された文化である。フランスは透明性から保護されている国であり、私生活の情報開示を強いる法律は存在しない。フランス社会は権力者のイメージを壊す男女を拒絶する。フランス人の偽善は、米国の男女関係の伝統主義、熱烈な平等主義、セクハラを阻む手続きを笑いものにしている。」

そして、第3の教訓は、「男女平等の要求」であり、「男性の逸脱行為に対する治療があるとすれば、それは男女の平等である。女性の進出が進んでいる病院や新聞雑誌業界では、30年前に認められた男性の行動は認められなくなってきている。マルチヌ・オブリ(社会党第1書記)とクリスティヌ・ラガルド(7月5日よりIMF専務理事)だけでは政界の慣習を変えることはできない。女性の進出が進み、男性と同じレベルの権力を持つことが政界とマスメディアをより健全なものにする。」

ほんの30年ほど前には、フランスではレイプは犯罪ではなかった(1978年レイプ禁止)ことを考えると意外な気もするが、男女間の平等は近年ようやく実現されてきたのが現実だ。DSK事件は8月23日、検察側の訴追取り下げ申請を認めて控訴棄却が決定され、あっけなく幕を閉じたが、民事訴訟が横行する可能性もあり、米仏文化の違いを知るには格好の話題かも知れない。

編集室より — キーワード探索 —

「MANGA」— いつしか、押しも押されもしない世界語となったが、手元の仏和辞書にはまだ載っていない。●そこで、まずネット情報から再確認すると、ヨーロッパ言語圏においては、「MANGA」とは「日本のまんが」のみを指す言葉である。ベルギーやフランスを中心とする地域の漫画は、「描かれた帯=Bande Dessinée=B.D.(ベデ)」。●日本語では、「漫画」は一枚絵も指すが、今世紀、その豊かな現実感、物語性そして特異な表現技法でもって、遠い西の異文化の壁を破り、多くの人々の心を掴んだ「MANGA」は、「絵を連続させ、多くはセリフを伴い物語風になったもの」即ち劇画漫画である。●「漫画」は純日本産の言葉である。●詳しい経緯は不明だが、「慢筆=気の向くまま書く」という漢語から、絵を描く意味を含めた「慢筆画」が生まれ、「漫画」に至った—という説が有力。江戸中期では、戯画風スケッチ(北斎漫画等)を指し、日常的に使われるようになったのは、昭和時代に入ってからだ。●その前の大正時代に、日本語「漫画」が「中国へ輸出」された。近年の中国の漫画熱も、社会現象を生む程に高い。日本漫画に魅せられて、ついには日本で「漫画家」としてデビューを果たした中国人青年もいる。いずれ「日本製以外のMANGA」も世界を賑わすだろう。遅かれ早かれ。- W -

(参照: Wikipedia、岩波国語辞典)

昔日の青春「佛友會々報」

80年のタイムカプセルを開ける2

坂井英俊 (昭 40)

昭和7年版の「あとがき」には<会員同士が、気持ちを寛いで懐かしさをお互いに感じあひながら、前に増してこの会報に仏友会に、親しみ、それを愛されて、暫く会へなかった親しい友人に溜まった話をされるつもりで、或いは懐かしい母校を久し振りに訪れて色々と話されるやうな気持ちで、この会報に宛て、度々便りを下さることを願ひしたいのです。こうした愉快な懐かしい機関が、何処までも永続してゆくことを>とある。楽しげに無邪気に書かれてはいるが、あの苛酷な戦時下である、遠い友に救いを求めるかのような若者の本音が、今80年後の我々の耳にも聞こえてはこないであろうか。また、

<出鱈目に投げた石でも凡て放物線を描くものです>と、佐久間寿はさりげなく記す。この放物線とはおそらく若者の夢をさすのではなく、現人神・天皇の国家が定めた放物線、いうまでもなく召集令状(赤紙)と「戦死の予感」を指すのであろう。近い将来に自らの死を予見していた彼ら世代の哀切な諦観・絶望・憧憬が、寄稿の文面では童話のように、空しく透明に表されていることが感じられていたましい。

<ジャパン・ツーリスト・ビューロー上海支店在勤の山田源次氏は、かの上海事変に際して、どてら一枚で孤軍奮闘、実に目覚しい活躍をされた。その慰労の意味でローマに派遣され、且つ上海支店主任に栄転された。同氏は、最近結婚されたのである>と会報は伝える。が、外語学校生らは上海事変の隠された意味を知っていたのか、いなかったのか、「どてら一枚のめざましい孤軍奮闘」とはなんだったのか。真実を尊ぶ読者諸兄姉には、上海事変前後の暗闘と凄惨な実態と